

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポルトガル語における中性代名詞oについて
Author(s)	坂東, 照啓
Citation	ニダバ , 21 : 39 - 48
Issue Date	1992-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047228
Right	
Relation	



ポルトガル語における中性代名詞 *o* について

坂 東 照 啓

1. はじめに

ポルトガル語における中性代名詞 *o* は、音韻的にそれ自身アクセントを持たない、いわゆる clitic であり、性数による変化もない。一般には、この要素は、指示代名詞 (pronome demonstrativo) の一つとして分類され、中性指示代名詞 *isto* 「これ、このこと」、*isso* 「それ、そのこと」、*aquilo* 「あれ、あのこと」に相当する (equivalente) ものであると述べられている。

実際、中性代名詞 *o* とそれらの中性指示代名詞の間には、直観的に何らかの共通する意味が存在すると思われるであろうが、中性代名詞 *o* とそれらの中性指示代名詞を置き換えると、文法的ではなくなる構文なども存在するのであるから、伝統的な文法書によく見られる上のような類の記述は、少なくとも誤解を招くものと言わざるおえない。おそらく、そうした問題を含む記述は、単に漠然とした意味を抛りどころとしたために生まれたものではないかと思われる。やはり、ここで、文法構造を見据えた分析によって、中性代名詞 *o* の基本的な意義を捉え直しておくことが、その用法を、的確かつ十分に記述するためにも必要ではないかと考える。

2. 従来の記述とその問題点

まず、中性代名詞 *o* が、伝統的な枠組みに従う文法書の中で、どのように記述されているのかを概観することから始め、続いて、男性単数が同形となる定冠詞、3人称直接目的格代名詞との関連などを通し、*o*, *a*, *os*, *as* が指示詞と呼びうるような要素であるかどうかを検討する。

2.1. Cunha & Cintra (1985) における記述

本稿で中性代名詞と呼ぶ要素は、従来の伝統的な文法の立場からは、“性数変化のある指示(代名)詞” *o* (男性単数), *a* (女性単数), *os* (男性複数), *as* (女性複数) と同じ節の中で、記述の対象として取り上げられることが多いようである。例えば、伝統的な記述方法をとっている代表的な文法書の一つ Cunha & Cintra (1985) では、「指示詞としての *o(s)*, *A(s)* (*o(s)*, *A(s)* COMO DEMONSTRATIVO)」(pp. 331-332) という見出し

のついた節があり、そこで中性代名詞の *o* も扱われている。以下の引用がその節であり、特に中性代名詞の *o* について述べられているのは、(1b) である (ただし、例文は省く)。

(1) **O DEMONSTRATIVO** *o* (*a, os, as*) é sempre pronome substantivo e emprega-se nos seguintes casos:

a) quando vem determinado por uma oração ou, mais raramente, por uma expressão adjetiva, e tem o significado de *aquele(s), aquela(s), aquilo*:

b) quando, no singular masculino, equivale a *isto, isso, aquilo*, e exerce as funções de objeto direto ou de predicativo, referindo-se a um substantivo, a um adjetivo, ao sentido geral de uma frase ou de um termo dela:

<指示詞 *o* (*a, os, as*)は、常に名詞で、次のような場合に用いられる。a) 文や、あるいは、より稀ではあるが、形容詞的表現によって限定される場合で、*aquele(s), aquela(s)* (「あれ(ら)」)、*aquilo* の意味を持つ。b) 男性単数では、*isto, isso, aquilo* に相当し、直接目的語、あるいは述語の機能を果たし、名詞、形容詞、文の全体的な意味、あるいは 文のある表現の総体的な意味を指し示す >

このように、中性代名詞 *o* の用法が、指示詞の男性単数形 *o* の一用法として述べられることは、現在、ごく一般的な記述の型となっているようである。しかし、このような取り扱い、分類が、中性代名詞 *o* の基本的な意義を反映したものであるのかという点については、検討を要するのではないかと考える。実際に、Cunha & Cintra (1985: 331-332) において、(1a), (1b) それぞれの例文としていくつか挙げられている中で最初のもは、(2), (3) である (なお、以下で用いる略号・記号については、後の【略記号】で一括して挙げておく)。

(2) *o* *homem* *que ri,*
the-m-sg man-m-sg who laugh+IdPs+3sg
liberta-se. *o* *que faz* *rir,*
liberate+IdPs+3sg-himself the-m-sg who make+IdPs+3sg laugh+If
esconde-se.
hide+IdPs+3sg-himself

<笑う人は、自らを解放する。笑わせる人は、自らを隠す >

(3) *o* *valor* *de uma* *desilusão,*
the-m-sg value-m-sg of a-f-sg disilllusion-f-sg
sabia-o *ela.*
know+IdPI+3sg-it she-f-sg

<ある迷いから覚めることの価値、彼女はそれを知っていた >

さて、(2), (3)におけるo は、“指示詞”とみなしうるようなものであろうか。(2)では、2つの文が並行的な関係にあると考えられることから、後の文の元の主語名詞句として o homem que faz rirが仮定されうるので、ここで指示代名詞とされているo は定冠詞で、homem が省略されているのではないかと考えられうる。(3)では、ここで指示詞男性単数形とされているo は、先行詞が名詞句 [o valor de uma desilusão] であるから、一見したところ、それに性数が一致している 3人称直接目的格代名詞のようにも見える⁽¹⁾。

つまり、(1)の用法を持つような“指示詞”と呼ばれているものだけでなく、定冠詞、3人称直接目的格代名詞が o (男性単数形), a (女性単数形), os (男性複数形), as (女性複数形) という形式で、男性単数の場合に中性代名詞o と同形となることが、こうした疑問の生じる要因となっているのである。それ故、中性代名詞o についての記述には、これら定冠詞、3人称直接目的格代名詞との区別、及び関連を考察することも不可欠と考えられる。

2.2. “性数変化する指示詞” o, a, os, as

一般に“性数変化する指示詞”と呼ばれている o(s), a(s) が現れている例としては、(4), (5)なども挙げられる。

(4) Este disco é o da
 this-m-sg disk-m-sg be+IdPs+3sg the-m-sg of-the-f-sg
 Ana.

Ann-f-sg

<このレコードはアナのです>

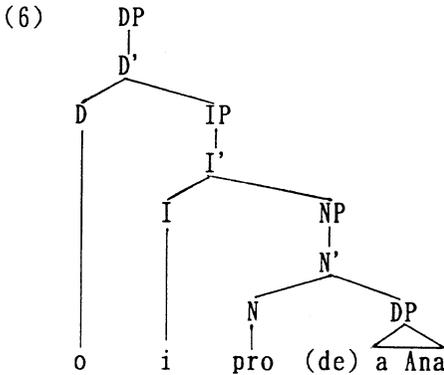
(5) Há três casas: a do
 have+IdPs+3sg three houses-f-pl the-f-sg of-the-m-sg
 meio é nossa.
 middle-m-sg be+IdPs+3sg ours-f-sg

<3軒の家があります。真ん中のが私たちのです>

(4)では、まず、“性数変化する指示詞”o に始まる補語名詞句が、主語名詞句との構造的並行性という観点から、o disco da Ana という形式と密接に関連していると考えられる。ところが、この形式における最初の要素であるo は、定冠詞であるとしか解釈しえないから、(4)におけるo が、仮に“指示詞”と呼びうるようなものであるとすると、その補語名詞句では名詞disco の(指示)代名詞化と定冠詞o の削除が関わっていると考えられることになる。

しかし、このような分析は認め難い。なぜなら、そもそも代名詞は、統語範疇として名詞句に相当し、単に名詞のみの代用として働くことはないはずだからである。それでは、これに代わる考え方は何かと言うと、音形を持たない名詞の代用形 (npro)が存在しているとみなすことであり、(4)の補語名詞句は、(6)のような構造を持っていると考えられ

る (i = 音形的に空の I) ⁽²⁾ ⁽³⁾。



(6)における Nのpro はdisco に対応し、それに伴い、一般に“指示詞”とされる o自体は単純に定冠詞とみなされる。これと同様に、(2)の後文における主語名詞節も(7)の構造を持つと考えられる。

(7) [DP o [IP AGR [NP pro [CP que_i t_i faz rir]]]]

(7)における npro は、homem に対応している。

(5)の後文における主語名詞句の場合は、[DP a npro do meio]で、npro が casa に対応し、先行詞である casasとは形態論上の完全な一致はない。つまり、こうした例から、名詞の代用形は、先行詞との間で数に関する一致を必要としないことがわかる。

このような分析がなされうる根拠としては、同じ語彙範疇である動詞についても音形を持たない代用形 (vpro)が、並行して存在するということがあげられる。次の(8), (9)のような例において、動詞の代用形が現れている。

(8) A cidade parecia mais alegre; o
 the-f-sg city-f-sg seem+IdPI+3sg more happy-f-sg the-m-sg
 povo mais contente.
 people-m-sg more content-m-sg

<街はより楽しく見えた。人々はより満足しているように見えた>

(9) Vamos jogar, só nós dois? Você chuta para
 go+SbPs+lpl play+If only we two-m you-sg kick+IdPs+3sg to
 mim e eu para você.
 me and I to you-sg

<遊ぼうよ、僕たち二人だけで。君が僕にボールを蹴って、そして僕が君にボールを蹴るんだ>

(8)の後文は、概略(10)のような構造を持っていると考えられる。

(10) [IP o povo_i vpro [IP t_i [AP mais contente]]]

(10)における vpro は、parecia に対応するものである⁽⁴⁾。

(9)の等位接続詞eに続く文の場合は、[IP eu vpro para você] で、vpro は

chuto (1人称単数現在形) に対応し、先行詞である chutaとは完全な形態論上の一致はない。つまり、動詞の代用形は、先行詞との間で人称(・数)に関する一致を必要としないのである。こうした動詞の代用形に観察される形態論上の特徴は、名詞の代用形が、先行詞と数に関する一致を必要としないということにも並行している。

われわれの考える名詞の代用形は、動詞の代用形と同様に、その先行詞がテキスト内に求められるという意味で、テキスト内照応であり、かつ、(意味論的にではなく、)統語論的にコントロールされるということが特徴として指摘される⁽⁵⁾。これに対し、中性代名詞oの場合は、そうした特徴を有する名詞の代用形が後続しているとは考えられず、従って、先行詞との関係は、意味論に基づいたものと言える。

2.3. 非指示性

前節(2.2)では、いわゆる性数変化する“指示詞” o, a, os, as が、定冠詞として捉えられることをみた。実際、これらは、空間直示的な作用を持たず、非指示的(non-demonstrative)な要素と言える。中性代名詞oも、一般には(1)の引用において述べられているように、“指示詞”に分類されている。しかし、中性代名詞oに指示的(demonstrative)な働きはあるのだろうか。

一般に、中性の指示代名詞に分類されているものとしては、oの他に、isto, isso, aquiloがあり、この3つについては、何らかのもの指しながら(11)のような文において使用することができる。

(11) Que é {isto/isso/aquilo}?
 what be+IdPs+3sg this that that

<これ/それ/あれは何ですか>

このように、isto, isso, aquiloには確かに指示的機能があり、これら相互の区別は、<話し手の領域(TS)>、<受け手の領域(TR)>という2つの特徴に基づいて、(12)のようになされる(ただし、+はその特徴を持つことを、-はその特徴を持たないことをそれぞれ示す)。

(12)	<TS>	<TR>
isto	+	-
isso	-	+
aquilo	-	-

しかしながら、中性代名詞oの場合、何らかのものを指しながら、それを(13)のような文において使用することはできない。

(13) *Que {é-o/ o é}?
 what be+IdPs+3sg-it

<それは何ですか>

(13)が認められないことから、oは、指示対象が存在する領域を選択的に指示する能

力を、内在的に備えているような要素ではないとみなされる。このため、中性代名詞 o は、指示代名詞ではなく、人称代名詞の一つであると考えられる⁽⁶⁾。

3. 3人称直接目的格代名詞・定冠詞との対比

前章では、中性代名詞 o が、非指示的(non-demonstrative)であり、照応語として機能する語であることを述べたが、本章では、そうした特徴を有する他の要素との対比を通じ、中性代名詞 o が、さらにどのような文法的特徴を持っているのかを探ることにしたい。

o という形式は、中性代名詞であるとともに、3人称直接目的格代名詞及び定冠詞の男性単数形でもあり、これら3つの間には、形式上同一であることから何らかの文法的な共通点があるのではないかと考えられる。事実、次のような特徴を共有している。

中性代名詞は、テキストに現れる先行詞が表していること(内容)を自らの指示対象としているという意味において、照応的な要素とみなされる。このような照応的という特徴は、3人称直接目的格代名詞・定冠詞も同様に有しているものであり、従って、 $<+$ 照応的 $>$ という特徴が、 o という形式に基本的に備わっていると言える。

それでは、次に、どのような点において、中性代名詞、3人称直接目的格代名詞、定冠詞の3つは、異なっているのかについて考えたい。

まず、中性代名詞と3人称直接目的格代名詞については、決定詞を主要部とする分析のもとでは、(14)のように、Dだけから成る名詞句として分析されうる(ただし、3人称直接目的格代名詞は男性単数で代表させる)。

(14) [_{DP} [_D [_D o]]]

これに対し、定冠詞は、後続要素を伴って名詞句を形成するので、 o copo 「そのコップ」であれば、(15)のような構造を持つものと考えられる。

(15) [_{DP} [_D [_D o]][_{IP} AGR [_{NP} copo]]]

(14)を(15)と比較すると、中性代名詞及び3人称直接目的格代名詞が定冠詞と区別される点は、NPに音形を持つ要素が生起しているか否かによるものと言えるが、さらに、ここで、(14)として示した中性代名詞、3人称直接目的格代名詞を主要部とする名詞句構造を、(15)のような定冠詞を主要部とする名詞句構造と並行的に示そうとすれば、

(16) のようになる(ただし、3人称直接目的格代名詞は男性単数で代表させる)。

(16) [_{DP} [_D [_D o]][_{IP} AGR [_{NP} pro]]]

つまり、中性代名詞、3人称直接目的格代名詞を主要部とする名詞句には、NPの代用形が存在していると考えることによって、定冠詞を主要部とする名詞句との構造的並行性を示しうる。しかし、中性代名詞を主要部とする名詞句に生起するNPの代用形と3人称直接目的格代名詞を主要部とする名詞句に生起するNPの代用形とは、その性格が異なると考えられる。例えば、(17)、(18)に現れる中性代名詞、3人称直接目的格代名詞を主要部とするそれぞれの名詞句を比較してみると、その違いが見出せよう。

(17) Ia dizer-lhe umas palavras duras,
 go+IdPI+lsg say+If-(to) him a-f-pl words-f-pl severe-f-pl
 mas não o fiz.
 but not it do+IdPP

<私は、彼に厳しい言葉を言おうとしていたが、言わなかった>

(18) Procurei o livro, mas não o
 seek+IdPP+lsg the-m-sg book-m-sg but not it-m-sg
 encontrei.
 find+IdPP+lsg

<私は、その本を探したが、見つからなかった>

(18)における3人称直接目的格代名詞を主要部とする名詞句 [DP o [1P AGR [NP pro]]] では、NPpro が前出のlivro に対応するのに対し、(17)における中性代名詞を主要部とする名詞句 [DP o [1P AGR [NP pro]]] では、NPpro に対応するような要素はテキスト内に存在しない。つまり、3人称直接目的格代名詞を主要部とする名詞句におけるNPpro が、文中の他の要素によって統語論的にコントロールされているのに対し、中性代名詞を主要部とする名詞句におけるNPpro は、そのような統語論的コントロールを受ける要素ではないのである⁽⁷⁾。

4. 分布上の制約

一般に、文法関係に基づく位置として、主語、補語、直接目的語、間接目的語、斜格語 (=前置詞の目的語) が認められるが、中性代名詞o は、節を伴わずに、単独で名詞句に相当する要素として生起する場合、それらの位置すべてに生起しうるわけではない。つまり、中性代名詞o は、補語と直接目的語の位置以外には、単独で生起しえないのである。こうした分布に関する制限が、中性代名詞o の持つ何らかの意味的な特徴を反映している可能性は否定しえない。

まず、間接目的語の位置については、別に lhe (男性単数・女性単数), lhes (男性複数・女性複数) という、弱形で照応的に働く3人称間接目的格代名詞が存在し、しかもこの位置は、基本的に<人間>を示す要素によって占められるという特徴があるため、主に抽象的な内容を表すような中性代名詞o がこの位置に生起することはありえないと考えられる。一方、主語、斜格語の位置に生起する要素には、間接目的語の位置の場合にみられるような意味論的な特徴を抽出することはできない。にもかかわらず、中性代名詞o はそれらの位置に、単独で生起することがないのである。これは、なぜであろうか。

照応語として主語、斜格語の位置に生起する要素には、3人称主格代名詞 ele (男性単数), ela (女性単数), eles (男性複数), elas (女性複数) が存在するが、これは、名詞句以外を受けることがないという点で、さまざまな表現形式を受けることのできる中

性代名詞 *o* とは異っており、文法関係に基づく位置によって相補的な分布関係にあるともみならずことはできない⁽⁸⁾。この点、3人称間接目的格代名詞も3人称主格代名詞と同じであり、それぞれ名詞句として次のような構造を持っていると考えられる(ただし、両者とも男性単数で代表させる)。

(19) [_{DP} [_{D'} [_D *ele*] [_{IP} AGR [_{NP} *pro*]]]]

(20) [_{DP} [_{D'} [_D *lhe*] [_{IP} AGR [_{NP} *pro*]]]]

(19), (20) における *NPpro* は、統語論的にコントロールされると考えられる。例えば、(21)における *ele* を主要部とする名詞句では、*NPpro* が *comércio externo* に、(22) における *lhe* を主要部とする名詞句では、*NPpro* が *Antônio* にそれぞれ対応する。

(21) *O comércio externo foi protegido pelos reis, pois viam proteger uma forma de desenvolvimento da riqueza do país.*
 the-m-sg trade-m-sg external-m-sg be+IdPP+3sg
 protegido pelos reis, pois viam
 protect+Pp+m+pl by-the-m-pl king-m-pl for see+IdPI+3pl
 nele uma forma de desenvolvimento da
 in-it-3sg a-f-sg form of development-m-sg of-the-f-sg
 riqueza do país.
 wealth-f-sg of-the-m-sg country-m-sg

<外国貿易は王によって保護された。というのは、それに国家の富の成長の一つの型を認めていたからである>

(22) *O pai chamou o Antônio para lhe dizer que o irmão estava esperando dele.*
 the-m-sg father-m-sg call+IdPP+3sg the-m-sg Anthony-m-sg
 para lhe dizer que o irmão estava
 for (to) him say+If that the-m-sg brother-m-sg be+IdPI+3sg
 à espera dele.
 at-the-f-sg waiting-f-sg of-he-m-sg.

<父は、兄が彼を待っていると彼に言うためにアントニオを呼んだ>

実際、主語、斜格語の位置で、名詞句に限らず、さまざまな表現形式を受けて生起するような照応語は見当たらない。しかしながら、これらの位置には、*isso* 「それ」、*isto* 「これ」といった指示語が、直示的に名詞句以外の表現形式をも指す要素として生起し、ある意味では、これらの指示語が、主語、斜格語の位置で生起しない中性代名詞 *o* に代わって生起する要素とも言える。ただ、このように考えるとしても、なぜ、主語と斜格語の位置に中性代名詞 *o* が現れないかということは、依然として疑問のままである。

この問いに対しては、主語及び前置詞+斜格語の生起が、文法的には随意であるということに着目することによって、一つの答となるような説明が導かれるのではないかと考えられる。つまり、主語、前置詞+斜格語は、形式的な文法上の要求というよりも、意味上

の要求によって現れるということであり、意味上の要求によるからには、それらの句に現れる代名詞によって指示される対象は、何らかの新たな評価を受けるものと考えられる。一方、既に文脈・状況において評価が決定してしまっている対象の場合、それを指示する代名詞をあえて用いるのは、文法上の要求を満たすためとしか考えられず、実際、目的語・補語が動詞によって文法上要求されるような場合でなければ、そうした意味上 unnecessary 代名詞の使用は、避けられるはずだからである。従って、中性代名詞 *o* が、主語と斜格語の位置には現れない理由は、この要素が、ある定まった対象を、単に評価済みのものとして、間接的に指示することしかできないからと考えられるのである。

5. 結論にかえて

中性代名詞 *o* については、従来、中性指示代名詞 *isto*, *isso*, *aquilo* との関連で記述されることは多かったが、案外、3人称（主格／直接目的格／間接目的格）代名詞、定冠詞との関係に注意が払われることはなかったのではなかろうか。

3人称代名詞、定冠詞、中性代名詞 *o* は、すべて照応語として機能するという点で、指示的な (DEM) 働きをする中性指示代名詞とは区別される。さらに、3人称代名詞と定冠詞は、それを主要語とする名詞句内の NP が統語論的にコントロールされている (SCNP) という点で、中性代名詞 *o* と区別され、また、定冠詞と3人称代名詞についても、それを主要部とする名詞句内の NP に顕在的要素を持つ (OMNP) か否かによって区別される。こうした本稿で検討してきたことは、次のような行列の表によって示される。

	<DEM>	<SCNP>	<OMNP>
中性代名詞 <i>o</i>	-	-	-
3人称代名詞	-	+	-
定冠詞	-	+	+
中性指示代名詞	+	-	-

本稿では、中性代名詞 *o* が持つ文法的特徴を考察してきたが、その結果として、この要素についての従来の伝統的な記述が、どのような点で、改訂・補足されるべきか示唆できたのではないかと考える。

【注】

- (1) *sabia*（不定形 *saber*「知る」）という動詞は、「人に伝えることのできる知識として、理性的に知っている」という意味であることと対応し、その目的語として節（命題）をもとりうる。それ故、(3)において、*sabia* の目的語である *o* は、[*o valor de uma desilusão*] といった語彙的名詞句 (lexical noun phrase) を先行詞としていても、それをそのまま文法的に受けていると決めることはできない。つまり、この例文の *o* は、先行詞を、単に統語論的な関係によって直接的に受けているのではなく、意味論的な関

- 係によって間接的に受け、命題に相当するような内容を指していると考えられることもでき、その場合は、3人称直接目的格代名詞ではなく、やはり、中性代名詞と解釈される。
- (2) 本稿では、いわゆる名詞句の主要部を、名詞(N)ではなく限定詞(D)とする拡大DP分析 (extended DP analysis) に従う。この分析では、名詞句は D層、I層、N層という3つの層から成ると考えられ、それによって名詞句と文の並行性が示される。詳細な議論は、Tonoike(1991)を参照のこと。
- (3) DP に対しては、従来通りの名詞句という用語を用いる。NP と表記した場合、従来の意味での名詞句ではない点に注意されたい。
- (4) *o povo*_i は、*ti* の位置から移動していると考えられ、このような名詞句の移動は、一般に繰り上げ(Raising)と呼ばれているものである。この型の構文については、坂東(1991a)を参照されたい。
- (5) こうした名詞、動詞の代用形は、最大限の経済性を達成しているとともに、その存在によって、他の顕在する部分に焦点があることを示すという機能を持つと考えられる。
- (6) 中性代名詞の *o* が、非指示的であるにもかかわらず、指示代名詞と分類されてきたのは、ラテン語の指示詞 *illud* (遠称) から派生したという通時的な視点が影響しているからであろう。
- (7) 中性指示代名詞 *isto*, *isso*, *aquilo* の場合も、それを主要部とする名詞句での *n_{NP}pro* は先行詞を持たず、統語論的にコントロールされていない。この特徴は、一般に“中性”と呼ばれる代名詞が共通に有するものであろう。
- (8) *ele(s)*, *ela(s)* は、主語、斜格語としてのみならず、補語としても、さらに、修飾語を伴えば、直接目的語としても生起する。

【略記号】

IdPs = 直説法現在, IdPI = 直説法未完了過去, IdPP = 直説法完了過去, If = 不定詞,
Pp = 過去分詞, 1 = 1人称, 3 = 3人称, m = 男性, f = 女性, sg = 単数, pl = 複数.

【参考文献】

- 坂東照啓. (1991a): 「英語・ポルトガル語におけるいわゆる繰り上げについて」 *NIDABA* 20. pp.90-99.
- 坂東照啓. (1991b): 「ポルトガル語の関係代名詞 *o qual* について」『ロマンス語研究』24. pp.3-9.
- Cunha, Celso. e Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Tonoike, Shigeo. (1991): 'The comparative syntax of English and Japanese: Relating unrelated languages.' in H. Nakajima (ed.), *Current English Linguistics in Japan*, pp.455-506, Mouton de Gruyter, Berlin.